

會



報

1964年6月

233

日本山岳会

山で会った人(二)

松方三郎

八月二十五日という富士山ももう山じまいだから、小屋はしめたところもあり、今日限りというところもある。山は別段どう変わったというでもないのに、登る人はぐんとへって、吉田口の七合あたりからふりかえってみても、歩いている人はちらほらといった具合である。

そんなちらほらの中に一人、水色のスカートをひらめかせながら、頭の真白なお婆さんが一人、金剛杖を片手にゆっくりゆっくり上って来るのだから、正に異様な風景だった。

日本人でないことは一目でわかったが、こんな山で一人でするのだろう。どこか泊る目当てでもあるのだろうか。

誰だっこの光景をみては心配にならざるをえない。

幸いこっちは家族ぐるみ来ているのだから、というのでお婆さんがおいついて来るのをまって、どんな話かきいてみようということになった。

聞いてみて驚いた。

お婆さんは日本について四日目なのである。どこの小屋に泊るな

どという目当てはもちろんない。お山は二十五日で閉めるなんていうことも初耳なのである。

それじゃ、うちの仲間と一緒に行きましょうということになり、とりあえず荷物は息子のしよい子につけた。(この荷物、お婆さんは荒縄で肩にしぼりつけて登って来たのだった)

登りながら段々に話をしてわかったのだが、このお婆さんは六十七、英国の有名な農事試験所の技師、細菌専門の植物学者なのである。あとで名刺をもらってわかったのだが、O.B.E. なんていう勲章をもっている博士なのである。このたび第一線を引退したので、世界漫遊の旅に出たのだが、どこに行っても試験所時代の因縁で、やれ意見をのべろの、やれ講演しろのと、一向のんびりしないので日本では一切知人も訪ねず、一人で歩くという話だった。

日本についていきなり日光に行き、今日は富士山。戦争後はアルプスにも行ってないが、戦争前はアルプスも歩いた、というのである。現在でもレイディース・アール・イン・クラブのメンバーだと

いうのだから、駆け出しではない。どうりで歩きつきが馬鹿にしかかりしていると思った。

去年はソマウェル夫妻とここに来たといったら、彼等も来たかと、大いにわが意を得たといった風、彼等を知っているのもあった。小屋に入っても、何一つ手がかかるわけではない。食べものも土地っ子なみ。便所の不潔なのは弱ったようだったが、これはこっちの女房が世話係についているから心配はいらない。

八合ホテルに一泊して翌朝は頂上までいったが、吉田の頂上からさらに剣ヶ峰まで行きたいという元気でである。一緒に歩いていると、岩の上についている菌類というのか地衣というのか、とにかく一つ一つ立止まって講釈である。これはブリティッシュ・ミニューゼウムに送ってやろう。あんなナイフはないか。何か包む紙はないか

といった具合だ。剣ヶ峰にたどりつくころは、こっちも一応ファンガスとやらいうものについて勉強させられてしまった。

二十六日は吉田の火祭りである。老女史はもちろん見たいというので、川口にホテルがとってあるのに一緒に吉田に下りた。

刑部で風呂に入ったり、みんなと夜食を一緒にしたりして、火祭りの吉田の一本道を散歩したが、

町におりて一風呂浴びると、見違えるような老レイディーになってしまう。例の荒縄でしよっていたボストン・バッグの中にかんんと着替えが入っていたのである。

吉田で分れてばく達は東京に帰って来たが老博士はその後九州を一巡りし、瀬戸内海から四国善通寺に出て、その試験所の知人を訪ねて東京に帰って来た。日本語などは二つか三つか知らないのだが、何一つ不自由はなかったとの報告があった。

ルーム移転御通知

社団法人 日本山岳会

御高承の如く、日本体育協会は六月末、原宿の新築ビルに移転することになりましたので、従って本会もかねがね移転先を物色中のところ、会員各位に御利用願う憩いの場としてのルームを左記へ移転することになりましたから御通知申し上げます。

記

一、移転先

東京都渋谷区原宿の一〇四

外苑コーポ内

電話402六、五〇一〜五

一、移転月日

七月十二日(日)

会員各位

ルーム・お別れパーティの記

六月三 水 会

日本山岳会東京支部



さよなら、お茶の水ルーム

関口周也撮影

起工 1948 年 12 月 29 日
竣工 1949 年 3 月 10 日

日本山岳会お茶の水ルームは、昭和二十四年いらい会員のクラブルームとして親しまれてきたが、体協の移転にともない、七月十二日、千駄谷、外苑コーポ内に移転することになった。

本会東京支部はそれに先立つ六月十七日(第三水曜日)午後六時半より、思い出多いルームで最後のお別れパーティを開いた。参加者九十一名を数え、庭一杯に溢れるばかりの盛況であった。

会坂倉登喜子委員の司会ですめられ、石原東京支部長のあいさつめ、松方会長、横、藤島、神谷、日高、瀬名、島田の各氏からそれぞれ心のこもった惜別の辞が述べられた。

夕闇の庭には終始談笑の渦がまき、なつかしい白樺の枝にランプが灯されるころ、全員で雪山讃歌、蛍の光を大合唱して散会した。

つぎに当夜のテーブル・スピーチの概要を記しておく(係)

◇ 司会 坂倉登喜子 ◇

皆さん今日はおいそがしいところをありがとございました。このルームも今月一杯でお別れになりましたので、本当に淋しい気がいたしました。本日はそのお別れのパーティをしましたところ皆さん多数お集まり下さいましてありがとございました。

はじめに石原支部長からあいさつ申上げたいと思います。

◆ 石原東京支部長

皆さん今夜はどうもありがとございました。いよいよこの建物と別れることになりました。戦後に灰の中から立上った山岳会も幾多の苦難を経て今日に至りました。この建物はその意味で大変思い出の深い、私ども山の仲間との記念の建物となりましたが、ここで別れることは、大変心淋しい思いがいたします。こんどの移転につ

きましては、東京支部の方でいろいろ移転の仕事をお引受することになったのでありますが、急に探したものですから充分な建物じゃございません。これから内部を増修いたしまして居住性のいい部屋に直したいと思いますが、それには先立つものがなんとやらでございます。部屋は二つありますが、さしあたりその一つの部屋に移ることになったのでございます。移転につきましては一応六月中旬にこれを立退くようにということでございしますが、できましたらすこし延ばしてもみたいと思っております。近く荷物を向うへ運ぶことになりました。今宵はそういう意味で甚だ名残り惜しい一夜となりましたので、戦後におけるいろいろな思い出もございまして、皆様ゆくり最後の晩を御相談いただきましたと思います。

松方会長

ルームができてから十四年、当時建築屋をやった居った加藤泰安君に頼んでこれを作ったんですが、これができるといって小島さんがとてもよろこんでいらした。山岳会もとうとう家をもつようになったかということ、一番よろこばれたのが小島さんであつたと思います。ところがこのルームができる前の年の十二月に小島さんは亡くなられてきたのが明けて二十四年二月でありました。

それでルームができてから最初にやったことは小島さんの記念の展覧会で小島さんの遺品や著書などを並べてこのルームでやったのです。その後そういう風にこを使ったことはないであります。——もっと使ってもよかったと思うんですが、その次にやったことは小島さんの像をつくって壁にはめようということ、もう外してあります。が、これも出来上って永く小島さんを記念することになったのであります。

そんなことで山岳会が一つの登山仲間のクラブとしていろいろな仕事をやる中で、やはり一つの拠点を一つに語ろうという場所をもつことを一番よろこんで下すったのは小島さんであつたと思います。それで小島さんが亡くなられてこれをお見せできなかったということが当時われわれの一番の残念なことでありました。

この、いま見るとあんまり大した建物じゃないけれども十数年前にはこれは実に堂々たるお城のような感じをもつて我々は非常によろこんでおります。まわりの変な建物もなく、恰度氷河の真中へつき出したモレーンの天辺に山小屋が建っているような感じで、両方から氷河が流れているようへ行くその突端に立っているような気持をもつていつも眺めたのであります。



ルームの裏庭と白樺 関口周也

いまは風景もだいぶ変わりました。その時分には下の道路からいきなりその（前庭の）石垣をあげる、一今日もちょっと登ってみようかと思ったんですが、一それが山岳会の一つの裏道でありました。ずい分登った人が多かったと思うんです。

私にとってはここにこの場所は因縁が深いところです。一九二〇年代から三〇年代のある時代、横さんは当時は本郷の真砂町に住ま

って居られました。私は当時本郷に文化アパートというのがあり（現存）そこに住まって居りました。朝、横さんが真砂町から歩いてくると、私は途中で合流して二人でよくここを、一氷河を下って行ったのであります。そうする

と下の小川町の方は家並も低く広々としている。ちょうどコンコルディア・プラッツみたいで、ユングフラウから下りてくるとあんな感じだね、などというながら、氷河をグレッチャ・ツールをやって下へ下りて、横さんは日本橋の会社、私は丸ビルの会社という風によくここを歩いたのであります。そんな関係でこの建物ができる前からこの辺はなつかしいところでもあります。

いよいよこれで原宿へ行くということになる、またこれは一つのお互いの一生の中のある時代、原宿時代というのが自からできると思います。そこでまずこのお茶の水時代というのがだれにとっても一つのエポックとしてここ

で切られるわけでありまして。そういう点でお互いに名残惜しく感じられるのであります。こんどの家は、さきほど石原さんが金のことを心配して居られましたが、すこし無理をしてもいいルームにしたい、いまは半分しか借りていないようですが、いずれはもっと広くしていい絵なんかかけてみんなの溜りにするのを楽しみたいところにしたい、という風に考えています。さらに将来はいつか家をもりたい。そして願わくばアルピネ・ミュージウムをつくって、日本における登山の博物館の小型のものができたらいいと思います。その一角にクラブがたむろするということができたらうれしい。

お互にまだ前途がだい分ありますから、ひとつぜひいい山岳会をつくろう、ルームを作ろうということにお互いに知恵をしばろうじやありませんか。ありがとうございました。

◆ 横 有恒

大へんなつかしいことを去って、どこへ行くのかと思って居りましたが、大へん結構なところを理事の方や皆さんのお骨折りで得られたそうのごいまして、まことにありがとうございました。今日そういうところを得るのは大へんむづかしいと思いますが、お骨折に対し感謝いたします。また引越しも容易でないと思いますが、それぞれの方に、どうぞ

いろんなつまらないものがあっても、それがなかなか歴史のあるものもあるだろうと思われまうので、大へん申し訳ないであります。が、お骨折に感謝いたしますと同時によろしくお願いしたいと思ひます。

私が憶えています範囲では、日本山岳会の事務所は、明治の終り頃は横浜の高野鷹蔵さんのお宅にあったのであります。本町と申しますが日本風の大きな宿屋が沢山あるところで、高野さんのお宅もそうでありました。それから関東大震災ののちには品川八ツ山の鳥山悌成さんのお宅に事務所をおいたのであります。

その後事務所はクラブのような部屋も欲しいというわけで虎の門に移りました。二層ビル内に事務所を持って、そこで戦争を迎えたのであります。戦争がはげしくなりましたので図書なんかも疎開しようとして箱詰めにして、まだ持出す前に空襲にあつて全部焼いてしまったのであります。

今日ここにあります図書は全部戦後に厚意ある会員の皆さん方、或は会ご自身の力によって集められたものであります。前のものがなくなったのは残念であります。が、このお茶の水の建物を建てるについては藤島敏男さんが非常に骨を折られたのであります。なかなか藤島さんというのはヘソ曲りでありまして、どうかよろしく頼むなんていうと、オレはいやだ

といって、すぐ一言のもとに何でもお断りになるのであります。が、どういふことでありましたが、おそれる藤島さんの生涯で仏心（ほとけごろ）の盛んなときであったんでないかと（笑声）思うんであります。が、率先してもっといいやな寄附金の募集でありますとか、すべてをなすつたのであります。この建物が建つということについては藤島敏男さんのお骨折りのいうものは忘れることのできないことであります。私なんかただワキから野次たり拝見しておただけであります。藤島さんの熱意とあの足にまめをつくって奔走なすつたあのことがなければこの建物は建たなかったと思ひます。

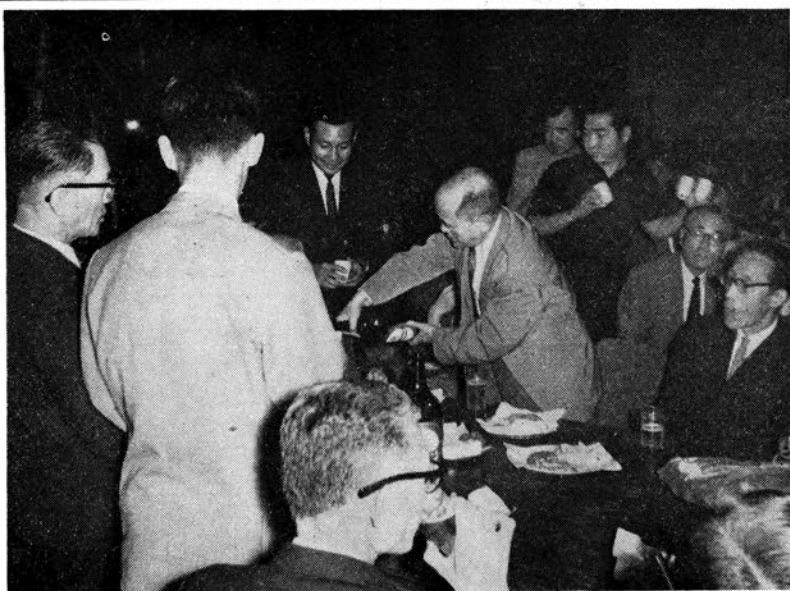
今日この小屋を去るに当りまして藤島敏男さんに深くお礼を申し上げたいと思います。と同時にそれほど可愛がっておつくりになった小屋を去ることは藤島さん一人（ひとしお）感慨が深いこととお察しいたします。

山岳会はなかなか流浪の旅に出るのが好きであります。ルームの方も転々としてまいりますけれども、転々とするたびになかなかよくなりまして、新しい会員の方もふえられ、その中から将来は恐らく思い切った立派なものをお建てになることも来るだろうと思ひます。大変今晩は盛大であります。またことに愉快であります。重ねて藤島さんにお礼を申し上げ

たいと思います。

藤島 敏男

いま向うの方にいましたら、横さんが私のことをとかく棚卸しをしたそうですから、それでこっ



左端・藤島敏男氏、中央、ビールをつくのは 横 有恒氏

—1964年6月17日—

牧野 衛 撮影

館でもって、このテーブルの半分もないようなテーブルではじまったのであります。そのとき隣りにはラグビー協会かなんかそういうものもありました。漕艇協会もあったかもしれない。大体そういう

つきりしないのであります。小原君なんかきて「山岳会は部屋がないと困るだろう」というようなことをいっての覚えていま

それから私なんか虎の門時代から知ってるんですから、何かななくちゃいけないという、そこでこういうものを建てるというので、多分この土地を借りて、最初の設計は小原君の關係で安藤組が設計図をひいたと思います。そして工事は加藤泰安が三友土建の社長さんをやっていたので、そこに頼んでやったのであります。

それでお金を集めることになつて私が、金あつめはあまり上手くないのであります。頼まれてあちこち歩いて、たしか五十何万円かけて、これは出来たものであります。これができてさきほど松方君のお話のように、小島さんにお目にかかれなかったのは大へん残念でしたが、とにかくみんな大へんよろこんでこへ集まるようになった。

それからこんどはこの部屋で酒がでるようになったのは、名誉会員の故加賀正太郎さんがウイスキー会社の社長であつて、クラブで酒のないうのはクラブではないという説がありまして、これは私なども大賛成でありますから、それでウイスキーをこへわけてやろうというので、土曜日にお酒を飲むということがはじまったのであります。ここができた当初は階下

でお酒を飲んでいました。ところが若い方がきて、ルームに行ってもオエラ方が向うの方にいて窮屈だと言ふ話があつて、オエラ方というのはどういうのを言うのかと聞き直した人もいるようですが、それでこの二階をこしらえたので

(二階の改装は廿六年二月)、窮屈がられるようなのは二階へ上つて一杯飲むという、言わゆる登楼をしたわけでありまして、近ごろは階下で飲むことになりました。で、考えてみると昭和二十四年から今日まで十五年間、いろんなことがありました。けれども、とにかく山岳会というものはさきほど申し上げたようにほかの運動団体とちがつてクラブという色彩が非常に強いのであります。その意味ではこの利用は十分にされたと思ひますが、今度行くところもどうかジャパニーズ・アルパイン・クラブなんです。メンバーになった方はクラブへときどき顔を出すということが必要だと僕は思うのであります。

クラブというものは人と人との關係でありますから、どうかこんどのクラブへもメンバーは折があったら立寄つて、そこで先輩とも知り合うとか、同輩とも知り合うというふうにして、山岳会はクラブであるということがこれからもつづいて行くように私は願ひします。

ただ今坂倉さんから指名があ

神谷 恭

つたものですから一言申し上げます。藤島さんからこのルームの生い立ちについてこまかく説明があったのでいろいろと忘れていたことを思い出したのであります。が、さきほどのお話で週末の集まりが、酒を飲むことからはじまったように誤解される向きがあると

いけませんから念のために一言申し添えておきます。これははじめはお酒はなかったものであります。ルームはできたけれど、ときどき集會するだけでは大へんさびしい、週末くらいは皆で寄つてゆつくり話したい、ということをお願い出したのは私であります。そして藤島君、成瀬君、小原君、加藤泰安君と私の五人でそういうことがはじまったのであります。毎週の週末をこで落合いまして大へん楽しく、勿論お茶一杯でやっておりまして。その後加賀さんからさきほど藤島君のお話にありました通り、どうもクラブに酒がないのはさびしい、というお話があったものですから私がもっぱ

らその方の、——私は山岳会には加賀さんと中村清太郎さんに入れて貰つた縁故があり、私とその番に振当てられまして、ついでにバーテンまでもやれというふうなことでもとうとう山岳会の「神谷バー」ということになつてしまひました。いろいろ毎週土曜日、私は用があつてもなくても、山に行かないかぎりここへ来なければならぬということになつてしまひま

の方へきて、どういふことをいつてるか聞いているところでしたが、何か言えと仰有るのならばすこし申します。

山岳会は戦争後、体育協会の本

ものと山岳会は性質が違ふのであります。机一つで会はできないところですから、なにかしらえようということをして、誰が言い出したか、言い出した人はなかなか

した。おかげでいまは大へん後悔をしている(笑)のでありますが、やっと年期がつもりまして今度は放免していただけるようなことになるかもしれません、けれども、なんとかつづき限りは、週末を皆さんで楽しんでいただけるようなクラブ的な集まりを、末永くつづけて行っていただきたいと思っています。

なおさきほど藤島君からここを建築するまでのことについていろいろ仰有っていただきましたが、今日までながいことこのルームのメンテナウスの方面で大へんご厄介になった方々のお名前を上げないと失礼なことになりますから一寸ご披露しておきますが、会員の松本熊次郎さん、牧野衛さんらがいつも交替で屋根修理、ペンキ塗装、扉修理、倉庫増築などの仕事を奉仕して下さってこのルームの維持にお骨折を願ってきまして、そういう方々にこの際皆さんからも感謝の意を表していただきたいと思っています。

◆ 日高信六郎

私はこのルームができることについて何のお役にも立っておりません。外国に行っておりまして、できた当時の話も存じません。ですから申し上げることも別にもありませんが、実はさきほど会長にも申し上げたんですが、先日このルームが引越すことに大体決まりましたときに、高野鷹蔵さんからお手紙

をいただきました。そのお手紙には、いよいよ引越すことになりました。それが引越す前に骨を折った方のことを皆で思い出していただきたい、ということが特に切実に書いてございました。今夕皆さんがお話になったことで、大體お骨折になった方々は自分でもお話になり、また皆さんのなかからご披露があつて拍手のうちに聞取り願つたのでありますが、それと同時に高野さんのお手紙にはこのルームの細かいところまで写真に撮つて残しておいて頂きたいということも書いてございました。この手紙の内容についてはその当時ご披露したことを覚えておりますが、この写真記録の方もただいま聞きますと、関口さん、中さんなど会員の方々のお骨折できておるということでもありますから、私は今夜にでも高野鷹蔵さんに早速ご報告したいと思っております。

◆ 瀬名 貞利

私は昭和十三年ごろ藤島先輩にすめられて入会したのですが、虎の門のルームはあんまりおなじみにならないうちに焼けてしまいましたので、このルームができてから皆さんによくお目にかかることができました。ここへ参りまして、ことに土曜会でいろいろ先輩の山のお話、また若い方々の新しい山のお話を伺つて大へん楽しい日をすごしております。本当

に都心のオアシスで、大へんうれしい場所だったんですが、いよいよお別れになって感慨一入です。こんどの原宿のルームは半地下式ではあつても暗いところはなく、大へん明るい場所だそうですし、それに明治神宮も近いので小鳥の声も聞えて楽しく暮せるんじゃないかと思つて居ります。いろいろ皆さんが仰有つたのでいまさら私がつけ加えることもございませんでこの辺で失礼いたします。

◆ 島田 巽

このルームがなくなるというので非常に残念なんですが、このルームの一番はじめの印象としていまだに私が思い出しますのは、ここで松方さんたちのお手伝いをして小島鳥水さんの展覧会をやつたときのこと、いまでも鮮やかに思い出されます。ルームは木の香も新しい時分で、ここで小島さんの展覧会を、——展覧会と申しますが、小島さんの愛蔵の図書の展覧会をここで開こうということを小島さんにお話ししましたら大変喜んで下さいまして、そして何でも自分の持っているものは陳列しようというのを仰有つて下さいました。そして阿佐ヶ谷のおうちへ伺つてはいろいろおねだりをして、貴重品をここに持ち出して陳列させていただきまして、まだ戦後間もないころで、目録の印刷もできませんでしたが、私は弟にたのみましてガリ版

を切つて印刷してもらい、謄写版の目録を作つておわちしたことを覚えておりますが、一番の楽しみにしておりましたこと、つまり小島さんをこの会場にお迎えして、小島さんに新しいルームを見ていただき、そして小島さんご自身の蔵書の展覧会を、ご自身に見ていただくという希望は残念ながらお亡くなりになったために果せませんでした。奥さまはじめ家族の方々をお招きしてここで開会いたしたので、私としては残念なこととございました。展覧会のあと

で、皆さんのお手元にもあると思いますけれども、「山岳」の小島鳥水追悼号というのが、その展覧会から実を結んで出て、そしてあの当時はなかなかできなかったのに「山岳」の別刷として固い装幀をつけて「小島鳥水追悼」という一冊をおわちしたことを覚えて居ります。

その後いろいろとなつかしい思い出もございすけれども、私としては小島鳥水展覧会をもってこの小屋が開かれた当時から、いま非常になつかしく思い出して居ります。(拍手)



新ルーム付近略図

渋谷区原宿 1-104 外苑コーポ内

電話 (402) 6501~5

乗物 国電原宿駅-10分 バス東郷神社前-3分

交通 地下鉄外苑前駅-5分(原宿三丁目)

くぢう山名の記

橋本三八

同称異銘の山で有名な久住と九重の問題は一応総称を九重とし、頂上を久住ということで解決したかのように、案内地図や案内記も大部分はそれで処理されている。ところが現地大分県内では決して解決はしていないのであって何か新しい事態が生じてくると、噴火するように火花が散る。現在はその噴火状態で、火口付近には近寄れない有様となっている。その原因というのは、県で阿蘇国立公園にくぢうを加える申請をするに当って、さてそれでは久住とするか、九重とするかということである。

久住か九重か、その故事来歴は今更言っても、水掛け論で、確証はどちらにも有るといっても認めなければ何ともならない。そんなことで両者それまで何度も協議したが、いぜん平行線を走るばかりで、結局、投票となって九重が多数であったということであるが、久住側ではおさまらない。直ちに反対運動が起きている。筆者にも投票の直後新聞社から第三者の意見ということで電話があった。私は「山の名前を投票で決めるということには賛成しかねる。もう少し話し合えないものだろうか、これで

は結局大分県自身が困るだろう」と返事した。問題は漢字であって、昔はくぢう、くぢうで、一緒に仲よく一つの上宮にお詣りしていたのだから、仮名にすれば問題はない。一層のこと、阿蘇だけ漢字というのもおかしいなら、あそ・くぢう国立公園」と日本でただ一ヶ所仮名書きの国立公園も珍らしくて、PRするにも却って効果的かと思うがどうだろうか。

このくぢう噴火は東京まで感じたかどうかは知らないが、先日国土地理院から地形図における地名註記の問題点として、久住山と九重山について地名調査報告のパンフレットが資料課長から届けられた。小俣課長は一昨年だったか、現地調査で九重町（このえま）と久住町の関係者を同伴して私の勤める八幡製鉄九重山の家を訪ねられたことがある。

た箇所）総称的な意味で記入したものであるが、その位置が星生山と誤解されているようだから改訂の際記入箇所は変えること、星生山は新たに記入するということがあった。しかし、総称の点は、両者の意見が纏まらないでは、記入も出来ない。仮名という訳にはゆかない困ったことだ、と言って帰られていたが、この報告書を読むと、案外に困られてはいない。過去の詳しいいきさつから、地理院の確たる態度がうかがわれ、これでは地元関係者もいよいよ加減に解熱しないと地図の方は九重山と記入されて出てしまうかも知れないと思っている。

ところで、この紛争、私の個人的な感情からいうと、久住側に少なからず同情したいのである（同情なんてして貰いたくないと思われるのも承知の上）、と言うのは、私は過ぐる二月に、久し振りに久住高原に入り、赤川からはじめてである久住町まで、みぞれに濡れて、朝もやを脱いだ久住連峯を眺めながら歩いたが、朝の光に狐色のすゝきは艶々と輝いて、頂には雪もなく、冬の山とは思われない暖い山並で、それを眺めながら独り歩くのが無性にうれしかった。それにしても、毎月何日かを眺めている飯田側の九重連峯に比べて、何という相貌の違いであろう。——左に扇ヶ鼻の頭丈なトラ

高山深谷の追加話

高野鷹蔵

「高山深谷」のことをこの会報二二八号に書きました際、横山大観画伯に題詞を書いてももらいたいきさつを私は思い出さないと書きました。

先日鳥山佛成君が久しぶりに訪ねて下さいまして、そのいきさつを話してくれました。つまり私がモウロクをして思い出せなかった次第、

まことに汗顔の至りですが、年八十才という点でお笑い下さい。事の次第は、故梅沢親光君（会の発起人の一人）は当時の東京府立一中の出身でして、大観画伯もまた同じという次第、同窓のよしみというわけで、梅沢君が強引に頼んだのでしょう。それを私が頂戴に罷り出たので、私の記憶に下谷茅町の大観邸の玄関に立った覚えがあったのです。

鳥山君の話では、当時梅沢君曰く、大観に絵をかくてもう人はいざらにあるが、字を書かせたのはオレだけだ、と大いに豪語していたという話。

これで「高山深谷」の疑問点が水解しました。

（註）横山大観は旧姓酒井氏 本名秀麿 明治十八年東京府立一中卒業

第一回「山の画展」を終えて

時折ルームに集まる会員中の素人画伯の閑談が飛躍発展して、その名も「山彩会」と称して、若葉にかおる日比谷公園内の都営画廊で五月十二日から三日間催した画展は盛況裡に終了した。出展数は、この催しに進んで賛助出品していた足立画伯、鶴田画伯

富士箱根伊豆国立公園の中心である富士山は、わが国の最高峰（三七七六・三米）であり、世界の数多いコニデ火山の中でも、見事な均斉と清楚な美しさにおいて、全く比類のないものであります。

この高さ美しさによって富士山は、古くから歌にもよまれ詩にもうたわれて、あたかも日本民族の心の拠りどころのごときものになって来たのであり、国際的にも、わが国にもっともふさわしい象徴とされている山であります。

さらにまた、自然科学の面においても、富士山は極めて貴重な存在とされております。ことに植物生態学や地質学の分野で、富士山が掛け替えない研究場であることは、広く内外学界の認めるところであります。

富士山はかつては神聖なる信仰の山でありました。登山者にとっては専ら、心身を清め鍛練する道場でありました。こうした時代が過去のものとなったことは申すまでもありません。しかし富士山をあくまで清浄な自然の

の御作を含めて五十点。世話人一同万事不慣れの上に一文なしで企画実行した画展にしては、ばるも出さなかつたばかりでなく、画も売れて、些少ながら本会の「自然保護委員会」の活動資金として金一封寄附できた事は関係者一同にとって同慶のいたりである。出展画は別記の通りであるが、松方さんの身替り出品として展示されたエヴェレストの大先達H・ソマーベルさんの油彩画「エヴェレスト

」は真打ちの稀観品でありこの画展の点睛であった。会期中来場者約一五〇〇名。会員の中から「こんな画なら俺でも描ける」等のうそぶきも聴えたので次回は更に多彩な内容で画展を催せると思う、時期は来春五月の予定。今画展に際し展示・跡片付け・店番・目録作り等、それぞれ進んで忙中お手伝い下さった方々に、心厚くお礼申し上げます
(交野記)

須田 紀子 小品・槍ヶ岳・北穂
吉阪 隆正 高・春の花
枚田美智子 九合目・六合目・火山
山下 一夫 甲斐駒と鋤岳・南アルプス・八ヶ岳(A・B)・甲斐路・おおさくら草
石原 憲治 初夏の南アルプス(A・B)、五月の上

坂倉登喜子 高地・青木湖
早川 義郎 北アルプス(A・B) 岩手山・浅間山・笠ヶ岳・金精峠の展望
村井 米子 二月の富士
辰沼 広吉 スケッチ帖より
交野 武一 山(A・B)、マナスル・カシミール風景
後藤 幹次 霧の山寮・小田代原
織内 信彦 奥湯河原・須山にて・れんげ

ままの姿において大切にしたいという心持は、今日もなお変わってはいないと思います。そして日本一の高峰であるこの山こそは、自らの努力をもつて汗を流して歩いて登るべき山であるとして、大多数の日本人は考えているのであります。一年の間に三十数万人の人がこの山に登っているという事実がこれを証明して余りあります。

冬期積雪期間を除くならば、富士山は決して難しい山とは申せません。誰でも登ろうと決心し、努力をするならば、頂上に達しうる山であります。従って今日あるがままの状態においても、富士山は、老若男女何人に対しても広くその頂上を解放しているのではありません。それにも抱らず今日以上にさらにこの山に人工を加え、ことにケールなどを架設して、大量に観光客を輸送し、一層の混雑を招来しなければ

ならないという理由は、営利以外には、これを発見することが不可能なのであります。最近の富士山登山ケーブルの計画はいずれも地下トンネルを掘り、それによつて八合目に達するもののようにあります。今日の日本の技術をもつて、かかるケーブルの架設は恐らくは可能でありましょう。地下式にすることによつて景観を損じまいという配

明であらうと考えます。かつて富士山麓の森林地帯は広大な原生林によつて樹海と呼ばれておりました。今日この樹海は無秩序な道路開鑿によつて寸断せられ、昔日の面影をとどめていません。野鳥の宝庫といわれていた山麓一帯のかかる荒廃は、今や野鳥を放逐し尽そうとしているのであります。自然保護の立場よりするならば、山麓の問題も重大な問題とし留意する必要があることを痛感するのであります。

富士山の自然保護に関する陳情書(抜萃)

慮のあることも了解するのにやぶさかではありません。しかし何れにしても、これが自然に対する人工、また機械力の破壊である点において変わりありません。

自然を人の知恵と力によつて変えることが、文明の一面であることは争う余地はないと思いますが、その人工を一定の線にとどめ、その限界を守るの道を知ることが、さらに一段高い文

この意味において富士山については、五合目以上は全面的に、かつ一日も早く国立公園特別保護地区として指定されるのが適当と考えます。また、五合目以下の垂直的植物分布を含む原生林帯並に青木原原生林をはじめ、山麓一帯についても、今日の如き無秩序な開発を許すことなく、一貫した計画のもとに保護と利用との計画を予め樹立せられることを希望してやみません。

昭和三十九年五月七日
財団法人 日本自然保護協会

足立源一郎 仙丈岳・カンチエン
鶴田 吾郎 ジュンガ

神谷 恭 故大森明悦作 初秋
賛助 富士

後藤 幹次 岩手山(A・B)・蔵
織内 信彦 王竜山
塚越 雅則 王竜山
松方 三郎 王竜山

吉阪 隆正 王竜山
交野 武一 王竜山
辰沼 広吉 王竜山
村井 米子 王竜山
坂倉登喜子 王竜山

ヒマラヤに於ける 婦人登山隊の近況

松田柳子

② 一九五六年——

Abinger Himalayan Expedition
前記 Monica Jackson 隊の遠征に刺戟され、翌一九五六年には五十三才の主婦 Joyce Dunsheath を隊長とする Abinger Himalayan Exp. がクルー地方の未知の Bara Shigri 氷河を訪れた。

彼女等は Cathedral (六四〇〇m) の登頂をはじめとして、すぐれた足跡を残し、帰路には Deo Tibba (六〇〇一m) の第三登にも成功した。

③ 一九五八年——

Women's Overland Himalayan Expedition
一九五八年、Anne Davies 隊長、Eve Sims, Antonia Deacock の三人による Women's Overland Himalayan Exp. が計画された。

この隊は、前記の Abinger 隊と同じく、英国からインドまで六週間のドライブを行なった。彼女等はラホール山の山々を広く歩き、五七〇〇米の無名峰に初登頂し、Biwi Giri (妻の峰) と名づけた。彼女達の夫は、いずれも登山家である。

④ 一九五九年——

The Women's Himalayan Exp.
婦人のみによるヒマラヤ登山史は、一九五五年、ジュガールヒマールを目指した Monica Jackson を隊長とする The Ladies' Scottish Climbing Club のメンバー三人による隊に始まる。

一九五九年秋、Claude Kogan を隊長とする、英・仏・ベルギー・インドの十二名よりなる国際登山隊が、女性として初の八〇〇〇m 峰登頂を目指し、Cho-Oyu (八二五三m) に向った。この隊の悲劇については今更のべるまでもないが、順調に育ちつつあった女性のヒマラヤ登山に大きなショックを与え、やはり八〇〇〇m 峰は女性には無理だという印象を世間一般の人に強く抱かせた。というのも、不世出の女性登山家としてあまりにも有名な Claude Kogan が隊員の Claudine Vander Straten、シェルパのアン・ノルプ・ツォーンと共に不帰の客となったからである。

彼女は一九五四年、同じチンオーで七七三〇m に達し、女性としての世界最高到達記録を樹立しており、八〇〇〇m に登りうる女性登山家は、彼女をおいて他に無いとさえ思われていた。この事故により、女性のヒマラヤ熱は大きく後退するかに思われたが、事実はその逆で、その後ますます盛んとなった。

⑤ 一九六〇年——
The Japanese Ladies Himalayan Exp. 1960.
そのトップを切ったのが、一九六〇年秋、日本から出かけた Deo Tibba 隊であった。ブッシュ山の会の細川沙多子氏は、ヒマラヤに行きたい仲間を集めて The Japan Ladies Alpine Club を作り、五名の隊員と共にパンジヤブ・ヒマラヤに向った。

Manali から Duhanghen Nala の源 (四〇九〇m) にベースキャンプを設け、その谷の氷河の末端に CI Duhanghen 峠を越えて Malana 氷河上に CI 頂上から南に落ちる氷河上、ピトン・リッジの頭直下に最終キャンプを次々に設け、十月七日正午に、浜中・岡部両隊員がシェルパのガルツェン、ダワ・トンダップと共に頂に立った。

下山後はダラムサラで、亡命中の十四世ダライ・ラマと、又ニエーデリーでネール首相とそれぞれ会見したのをはじめ、多くのインド人と会い、日印親善にも大いに尽した。

⑥ 同年——
Abinger Afghanistan Exp
一九六〇年秋、Joyce Dunsheath、Eleanor Baillie の二人から成る Abinger Afghanistan Exp. がイギリスから車でレニングラード、モスクワ、テヘラン、ヘラットを経てカブールに旅した。

目的は、ヒンズークシ山脈中の Mir Samir (六〇六〇m) とその周辺の山々の登頂であったが、途中テヘランから Elburz 山脈の火山 Demavend (五六七〇m) 峰にも登った。

Mir Samir のベースキャンプから Twin Top (四五七五米) 等に練習登山をしたのち、いよいよ Mir Samir にアタックを開始したが悪天候のため C Ⅲ (四五八〇米) で引き返さねばならなかった。

⑦ 一九六一年——

中国女子 Kongur-tube-tagh 登山隊
一九六一年春、中国女子コングル・チュービエ・タグ登山隊が、崑崙山脈中の Kongur-tube-tagh (Kungur I) (七五九五m) に向った。

袁揚を隊長に、医師の王義勤とチベット女性パントー、シラオ、チャムチンの五名であった。五月中旬から二回にわたる練習登山で高度馴化を行なったのち、六月十一日からアタックを開始した。六月十六日、七三〇〇米の地点に最終キャンプを張り、翌十七日に王義勤と三人のチベット女性は出発したが、王義勤とチャムチンは途中で疲労のため足並みが遅れたので、七五六〇米の地点で引かえた。

パントーとシラオは夕闇せまる頃ようやく頂上に立った。五星紅旗に二人の名と日付けを記入して埋め、頂上の小石をひろって下

末、中古の Land Rover の七〇〇〇マイル、六週間にわたるドライブを開始した。途中、地中海沿岸の Olympus 山(二九二〇〇米)に登ったりして、九月十二日(六二四九米の無名峯などに登頂した。

この二人は英国に帰らずに、デリーで仕事をして翌年春行なわれた Jagdula Exp. に再び参加した。

⑨

◇一九六二年——

Jagdula Expedition I

一九六二年の春、英国からの Jagdula Exp. が西ネパールに向かった。この隊は Dorothea Gra vina 隊長、Denis Evans, Josephine Scarr, Barbara Spark, Pat Wood, Nancy Smith の六名からなり、Jagdura Khola の Kanjiroba (六八五八呎)を目指した。

Nepalgunji から四十五頭のポニーをひきつれて Kaigaon (ヒネー)のキャンプを設け、五九四四呎の地点に最終キャンプ CIII を設け、五月十四日 Josephine と Barbara がヒネーとベンバをひきつて初登頂し、翌十五日 Pat, Nam

cy, Denis がアンペマをつれて第二登を行なった。第一目標がおわると速やかにベースキャンプをうつし、その南にのびる Kagmarata Isch の II・III 峯等に登頂した。帰路は Phoksundo Lake に立ち寄った後、ダウラギリの北をまわってポカラに帰った。この途中 Kakkot gaon でチューレン・ヒマールに向った日本の石坂隊に邂逅している。

⑩

◇インド女性の登山——
1962年～1963年
ヒマラヤのお膝元インドの女性達の登山は近年急速に盛んになった。

⑪

一九六二年には婦人隊がガルワルの Matri Peak (六七二〇呎) に向き、頂上直下一〇〇フィートに迫りながら敗退した。しかし一九六三年六月に、三人の婦人 (Nandini Patel, Kokila Mehra, Gira Shah) は再びこの山に向き、二十日その登頂に成功した。

彼女らは Gujarat にある登山学校 (ダージリンの、ヒマラヤ登山学校の分校) の卒業生で、これに先き立ち、六月の初めには Ahmedabad の Paribhraman より組織された十二名からなるガルワル遠征隊に参加し、Nandini, Kokila の二人は他の隊員に伍し、Sri Kailash (六九三二m) の登頂にも成功している。

一方同じ頃ダージリンのヒマラ

ヤ登山学校の校長 B.S. Jaswal
大佐に引率された Ladies Course
Run の生徒達もシッキムの Ka-
bru Dome (六五九九m) に登頂
を試みている。

この様に最近のインドの女性登
山熱はますます盛んになり、昨年
三田副会長がデリーを訪問した隊
に日本の女性との合同登山の話も
出た程である。

先覚者イギリス女性の活躍もな
るころながら、インド、中国等、ア
ジア女性の活躍をまのあたりに見
て、私達日本女性も細川隊に続い
て大いに奮起したいものである。

(一九六四年六月十八日)

参考文献

① The Alpine Journal Vol.
LXI, No. 292, p.60. The
Himalayan Journal/Vol.
XIX, p.75. "Tents in the
Clouds" by Monica Jackson
and Elizabeth Stark
「雲の中のテント」片山暢一
訳

② H.J. Vol. XX, p.104
"Mountains and Mensahin-
bs" by Joyce Duntheath,
Hilda Reid, Eileen Gregory
and Frances Delany
「女たちのヒマラヤ」広瀬玲
子訳

③ H.J. Vol. XXII, p.84
④ 「雪と岩」7 片山全平
川崎一郎 ベースボールマガ
ジン特集号「チョーオエーの

悲劇」

⑤ 「女六人ヒマラヤを行く」
「山岳」第五十六年 一〇八頁

A.A.J. Vol XII, p.281

⑥ A.A.J. Vol. XII, p.417
A.J. Vol. LXVI, No. 302, p.139

⑦ 「中国画報」一九六二年十月号

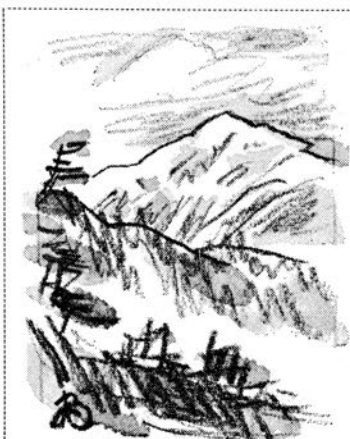
⑧ H.J. Vol. XXIII, p.62

⑨ A.J. Vol. LXVIII, 1962-1, p.65

⑩ The Statesman Calcutta ed., 26 June, 1963. The Statesman Calcutta ed., 20 May, 1963,

本号目次

一 山で会った人(二)……………ニ
ルムお別れパーティの記……………ニ
くちゅう山名の記……………六
・「高山深谷」の追加話……………六
・第一回「山の絵展」を終えて……………七
・富士山の自然保護に関する
陳情書(拔萃)……………七
・ヒマラヤに於ける婦人登山
隊の近況……………八
◆会員通信……………一〇
一 「高原風物誌」を読んで……………一
二 第4回登山技術講習会……………三
三 第19回団体に参加して……………三
四 第18回ウェストン祭……………三
五 木暮翁碑前・懇親会……………三
◆会務報告……………四



中村 清太郎 画

会員通信

山信一束

日高信六郎

今年は大した山歩きもやらないうちに、半ばを過ぎました。

二月にはテンジン・ノルゲイ君を迎えて、二年いろいろの懸案が解決し、肩の荷をおろしました。同君の話はおもしろく、その人柄は言動のはしに現われて、皇太子殿下はじめあたたく迎えてくだされた各方面のかたがたからいい評判をうかがったのはうれしいことでした。その月末には往復九日でジュネーブに行ってきた。

行きは北まわり、アラスカは雪に覆われ、おなじみのマッキンレーはクッキリとシルエットをあらわして、立ちほだかっていました。今年はスイスも暖冬で雪が少なくなくて雨がふらず、百姓が困っていました。私がつくと間もな

く雨になりま
した。しかし
帰りのジェッ
ト機は飛び
立って間もな
く、モンブラ
ンを晴れた空
の下に右がわ
に眺め、アル
プスの峯々を
かすめて上昇
しました。す

ばらしい景色でしたが、窓ぎわの席をふとったインド婆さんに占められ、よく見えなかったのは残念でした。カイロ、カラチ、ボンベイ、バンコック、マニラと飛ぶあいだ、下ばかりのぞいて海と陸、山と川、緑の森と赤茶けた砂漠などのコントラストに見とれました。

四月には吾妻スカイラインを通って裏磐梯松原湖畔に出来た国民休暇村の開所式に出ました。この辺は磐梯山の爆発で、莫大な量の岩石を吹きとばして、一挙にぶちまけたところですから、何とも唐突な地形をあらわし、七十五年たった今でも、どうも落ちつかない景色のように見えるのです。年月をかけて自然に出来あがった山川草木のたたずまいのすなおな美しさと、自然や人間や機械の暴力によって性急に造成された結果の無理なすがたとの対比を、今さらの

ようににとられました。

そのとき福島県観光課のかたとの約束を果たすべく、五月中旬には会員古沢肇さんと二人で、安達太良山の山開きに出かけました。このころがね小屋は温泉があるのときたないこととで有名でしたが、こんど県によって改築されたので、その小屋開きも同時に行なわれました。二本松駅で福島支部長の伊藤弥十郎さん、県や市の観光課のかたなどに迎えられ、岳温泉から湯川の谷をのぼって小屋に泊り、翌日無類の快晴にめぐまれて鉄山から頂上にまわり、蘆草履ばきの神主さんのお被いをつけたり、小屋に戻ってお儀式をすませ、岳温泉の祝宴に列してから夜行で帰京するまで、すっかり皆さんのお世話になり、まことに楽しい山歩きをしました。

六月のウェストン祭には大ぜいの会員諸兄姉の後について三年ぶりに徳本峠を越えました。翌日は恒例をやぶって嘘のような上天気、横さんと尾崎さんのお話を聞くのも、私にとってはこの日のありがたい獲物でした。帰りはバスで飯原に出て、鳥居峠の旧道を通り、奈良井まで歩きました。途中鶯と郭公の鳴声は絶えないが、人っ子一人にも会わず、短かい草の絨氈を敷きつめた上をユックリのぼる一人旅は快適をきわめ、奈良井にのこる古駅の風情をかみしめ

ながら、越後屋の入口をのぞいて、田部さんと尾崎さんなどをなつかしむ御主人夫婦とことばを交わしたのもうれいことでした。七月はじめ強羅で集りがあった機会に、明神ヶ岳を越えて道了さんにぬけました。こんなのは山歩きの中にはいらないでしょうが、このときも梅雨どきにしては天気がよく、出くわしたのはたった三人というわけで、一人で悦に入りました。

北岳山行

君島 久登

七月五日晴、参加者折井、山崎、広谷、飯野、関口、中、鈴木、小味、君島、外一名、山梨支部今沢、成沢、高野以上十三名前日(四日)甲府にて今井、望月、山村氏と参加者、昔話を語りつつ夕食、一泊。当日甲府発四時半、車にて広河原まで直接入る。大樺沢の河原を登り、途中よりバットレス第三尾根のパーティは先を急ぐ。残ったパーティは雪溪上に山を眺め、遊び、白峰お池付近に楽しむ。第三尾根のパーティは頂上十三時半、広河原にて合流、甲府着十八時半、北岳日帰りは超健脚の三名でもきつかった。

この日は富士山をきれいに運動と重なったため、富士山へ出かけた山梨支部の人が多く、お会

いできず残念でした。山をきれいにしようと僅かながらわれわれ一行も北岳で協力。広河原往復の車の御心配を下された三井支部長はじめ、支部の皆様は大変お世話になりました。ここをかりて御礼申し上げます。

新発田から

佐久間淳一

地震お見舞深謝申し上げます。当市はどうしたとか、災害救助法の適用を受けない附近唯一のところとなっているほど被害が少なく、まことに幸いました。市内在住JAC会員五名のところも無事です。これから休心下さい。新潟齋藤平七氏は自宅は無事です。工場は浸水、それに不同沈下で大変の模様。玄さんは床上浸水一週間、蔵書が濡れぬのがせめてもの慰め。井口ダナは家屋内のコンクリート地ワレ湧水で商売本を大分濡らした様子です。というわけで国体の後始末は自分お預けです。ルームにお集まりの皆様によろしく (七・一)

新潟から

齋藤 平七

国体で飾りつけた街も一瞬にしてパツとなりました。家もうしろへ傾き雨水が前へ流れません。工場は復旧に大奮です (七・七)

富山 石黒 清蔵

私たちが国体に参加したものが、その温かい思い出にふけっているときに突然大きな地震に襲われ、その被害たるや全く呆然とさせるものがあつた。謹んでお見舞申し上げるとともに一日も早く立直ら

れんことを望んでやみません。多少時間的ズレはありますが、国体当時の感想を綴ってみます。

開会式場の新設競技場は規模大きく、設備もよく整っていた。私しくは折よく聖火台、火焰土器という珍らしいもの——のすぐ近くに列していたが、点火された瞬間、満場の士気は高潮の極に達したと思われた。

私たち山岳部門が山で受けた待

遇は何とも言えぬ楽しいもの。関川村では花火の打上げ、鼓笛隊、吹奏楽団、村民総出の歓迎に恐縮した。村長の渡辺さんはわれわれの同志で心おきなく話されたが、邸宅は重要文化財で、今も立派に保存されていることには頭が下った。

会場飯豊連峯は越後の至宝、三日や四日登ったって、かすったとも言えない大自然である。その山

肌に流れ出る清冽な流れは越後平野をうるおしている。だから「山」そのものそこに生ずる植物までも含めて神聖視する信仰は根強いものがある。

飯豊川、胎内川、荒川は長くその自然を保っていてほしいもの、越後には多くの先覚が居られて、自然を手厚く保護されているのをこの眼で見てうれしい限りであった。

拜啓
初夏の候益々御清栄の段お慶び申し上げます。
当大阪市立大学山岳会の第二次ヒマラヤ遠征隊派遣につきましては格別の御高配にあつかり厚く御礼申し上げます。
現地よりの報告によりますと目的のランタン・リルン峰は状況著しく悪く放棄の止むなきに到りましたが同じランタン・ヒマールのウルキンマン峰を五月五日にキュンカ峰を五月八日に夫々登頂致しましたことを御報告申し上げます。

あいさつ

霧ヶ峰というと僕は二人の山男を思い出す。一人は木曾駒で亡くなった細井吉造君、今一人はヒュッテ霧ヶ峰の主人だったパイオニヤー長尾宏也君である。戦前ヒュッテが焼けて以来、長尾君も霧ヶ峰から去ってしまったので、霧ヶ峰に関してはこの二人とも過去の人というべきだろうが、この二人くらいあの草原の自然と風物に魅入られた人も少ないだろう。

この今井さんの珠玉のような随想集は、霧ヶ峰と蓼科山に関するものだけを集めたものだとはいうが、実に懐しい地名や人名が出てくる。

“滅びていった一つの風景の運命について語りたと思う”という書出しではじまる“滅びゆく風景”は、白樺湖以前という註がついているように、俗悪な今日の白樺湖になる以前の池ノ平の風景について書かれたもの

のある辺りから快適なスキーが楽しめた。ニ
ツコウキスゲやコバイケイソウの咲く湿原は
春の雪におおわれてギラギラと輝いていた
が、適当な斜面を見つけては二人で直滑降の
シユプールを描いて遊んだ。静寂そのものだ
った。

まだここに人造湖ができるなどという話は
芽も出していないかった。

それが今の変わり果てた姿。

す。

さて既に新聞にても御承知かと存じますが先に大阪市立大学第一次ヒマラヤ遠征隊に参加して不幸にも遭難死しましたガルツェン・ノルプの遺児ニマ・ラモさんをご機会に父君の知人の多い日本に招待してあげれば亡きガルツェン・ノルプにも喜んで貰えるであらうし、日・イ両国の親善の一役をも果たすのではないかとこのことで計画を

この二人に次いで現在はヒュッテ・ジャベールの経営者高橋達郎君が健在であり、また過去と現在の間中に交野武一君がいる。細井君を除けば三人とも霧ヶ峰での生活を体験し或は体験しつつある親しい友人である。

—「高原風物誌」を読んで—

渡辺公平

ところが最近出版された「高原風物誌」を
読んでもう一人、霧ヶ峰に縁の深い友のいる

ったというかつての池ノ平周辺には僕もまた忘れることのできない想い出がある。

こめられているつもり……と今井さんも、おとがき”に書いている。

ことを知って嬉しくなった。その著者今井雄二さんである。

この本の中に出てくる万仁武の小屋（雷小屋）もまだ建てられていなかった頃、人為的

「高原風物誌」は亡び去った愛すべき美しい風景、自然に対する挽歌のようにも僕の胸に響いてくる。

「高原風物誌」のページを開いてみて、今井夫妻がかつての池ノ平を愛し、戦争中には

なものの何一つ見られなかつた頃の池ノ平を、僕は細井君と二人で訪ねたことがある。

長尾君の労作「山の隣人」とはまた味わいが違ふけれども、詩情に満ちた霧ヶ峰の記録

南平の一角で炭焼生活をしたといふことを讀
しく知り、やはり長尾、細井、交野、高橋の
諸氏とともに、霧ヶ峰紳士録の中に加えられ

テからの帰りに車山を越えて池ノ平に下ったのだった。

として愛蔵されている本だと思う。

昭和三十九年五月十日

四月のはじめで、今コロボツクルヒユッテ

昭和三十九年五月十日
二一四頁四八〇円・東京同信社刊

昭和三十九年六月六日

大阪市立大学山岳会会長

栗飯原健二

日本山岳会々長

松方三郎殿

第4回

登山技術講習会

日本山岳会

東京支部

▽日時 昭和39年5月8日～18日
▽場所「講義」山岳会ルーム
「実技」上高地「岳沢」

△趣旨▽

氷雪上の歩行技術は登山の基礎として、最も重要な技術であるといわれているにもかかわらず、その正しい習得の機会に恵まれず、諸氏に、正しい基礎技術を身につけていただく目的で、過去三回にわたり登山技術講習会を開催して来たが、この経験を基に今回は、雪中露営の実地訓練を加えることにした。

△受講者氏名▽

細川雅弘、人見銀次郎、青木矣湯山城輔、野口勇太郎、山口重考、安藤祥、宮本重弘、細田勝康、岡部浩子、武田育子、今井通子、折井正子、菱川洋子、吉田聡子、小原和子
(以上 十六名)

△編成▽

○本部
チーフリーダー 山崎 安治

サブリーダー 芳野 越夫

技術リーダー 村木潤次郎

マネージャー 野萩 守

ドクター 長尾 梯夫

○講師(学科)

金坂一郎、芳野越夫、村木潤次郎

○講師(実技)

君島久登、広谷光一郎、小林正尚、倉知敬、村木潤次郎、小味秀純

○係

食糧係 小味秀純、君島久登

富田美知子

装備係 小林正尚、倉知 敬

連絡係 中 保

会計係 山口節子

△行動概要▽

五月八日講義(ルーム)、「残雪期の気象積雪」金坂一郎、「雪上技術の基礎」芳野越夫、

五月十二日講義(ルーム)、「積雪期幕営」村木潤次郎、実技準備会、

五月十五日二・〇〇第二上高地にて新宿発。

五月十六日(晴)四・〇八松本着、貸切バスにて七・〇三上高地

着、七・三〇神河内山荘着、幕営班、山荘班の荷物の分配を行なう。A班とB班を決定する。九・〇〇山荘発、一一・一〇体操後全

員にてテント設営訓練(三張)、一

二・一〇昼食、一三・〇〇講習開

始、全員にて西穂沢下部にて、キ

ックスステップによる登降訓練、滑

落

停止訓練、および制動確保による

ザイルワークについて基礎練習を

行なう。一六・二〇テント場帰着、

A班はテント泊、B班は山荘へ下

降、一七・三五山荘着、夜研究会。
五月十七日(晴)A班五・〇〇起床、B班四・三〇起床、六・〇〇山荘発、七・四五テント場着、A班と合流、八・一五テント場着、西穂沢を各パーティ毎に制動確保を主体とした連続、隔時登攀を練習しつつ、キックスステップにより登りつめ、一三・五〇稜線着、一五・〇五西穂頂上、一六・〇〇間の岳よりコンテにて下降、途中小事故発生のためテント帰着がおくれ、一七・〇五テント場着、B班はテント泊、A班は一七・二〇テント場発、一八・二〇山荘帰着、夜研究会。
五月十八日(晴後曇)B班五・三〇起床、A班五・〇〇起床、六・三〇山荘発、八・〇五テント場着、B班と合流、八・一〇よりテント撤収訓練九・〇〇テント場発、奥明神沢の急な雪壁にて制動確保の練習を行ない、同時にキックスステップ歩行のバランスの完成を目指した。一二・四五テント場帰着、一三・〇〇同所発、一四・二〇山荘帰着、一五・三五山荘発、一六・〇〇貸切バスにて上高地発、一八・一五松本着、二〇・二四普通列車にて松本発、翌十九日四・二七新宿着、解散。以上

平山金

前碑翁幕木

報告会親懇

山梨支部

甲府を五月十六日十一時三十分発の汽車に乗込むと、東京支部の一行、霧の旅会、石橋花山岳会の方々のなつかしいお顔を見ることのでき、蘆崎で下車。バスの時間が三十分程あるので、一同バス営業所まであるく。

五月にしては、照りすぎる街なみをはずれても変わらず、ほこりをまきあげ、震動の激しい道路を塩川にそってバスは行く。

やがて、ラジウム温泉に到着。待つことしばし、タクシーをつかまえる。便利になったものだ。今夜の泊り場、金山、有井館の軒下まで四百円と二十分の時間でついでしよう。

先着あり。三井支部長の総指揮、竹下礼子料理長の下に、支部の若い衆三人が、オデンをしこみ、春さくなどをゆでている。

今晩はすごい料理がでるぞ。期待に胸をふくらませて、四時より木暮碑前で記念会。

三井支部長司会で、神谷氏が、「霧の旅会、石橋花山岳会が碑前祭を十年続けて来ました。レリ

ーフを移してから山梨の方々に引継いでいただき、今年で四年になります。何時も金山で木暮さんの在りし日をしのんで、昔話に花を咲かせ、にぎやかに過ごさせていただき、有意義な毎年でありまし

と挨拶。続いて小野さんが、「地元の方々には、毎年お世話になります。月日のたつのは早いもので、本年で十四回目になります。私たちは始め、こんなに盛大なものを予期していたのではなく、ただ、木暮さんをしのんで、ここに置かしていただくといった意味でレリーフをつくりました。

はからずも地元の方々のご協力、しかも日本山岳会の主催で色々行事を行なっていたいただき、また秋にも重ねて、やっていただき、お礼の言葉もございません。」

また、島田巽さんは、「私は時代がらがって、木暮先生に山へ連れて行っていただいた経験はないのですが、山岳会のルームで始終お目にかかって、木暮さんがいらつしゃると下手なものは書けないなあ、始終監視の眼が光っているような気がして、今でもレリーフに相対しますと、そういう風な感じが致します。横浜の河野君がさそって来て、ここにまいったわけですが、山日記を開いてみましたら、一九三一年、山日記の第一号の出た年ですが、これにかいてあるのが、丁度、瑞麟

第十九回国体に参加して

今回の新潟国体は、オリンピックの都合により、例年より四ヶ月も早く開かれたために、山岳部門は残雪多く、種々の高山植物群の咲き競う飯豊連峰において催されたことは、参加者にとって有意義な山行でした。

われわれの参加した役員、視察員のコースは、日曹鉱山―湯の平―中峰―北股岳の往復でしたが、後半の天候悪く飯豊の山々や佐渡の島が見えなかったのは残念でした。しかし、雪渓とお花畑の規模の大きさは北アルプスにもちよつと見られないような立派なものがあつた。野鳥も北股岳に至るまで常にその声を聞かせ、耳を楽しませてくれました。湯の平においては、北股川の溪流を眺めつつ、雨の野天風呂に汗を流す等、まさに越後の山ならではの楽しみました。ともにこのコースに参加された方、とくに地元越後の方々には、大層お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

牧野 衛

広谷光一郎

君島 久登

新潟地震によって被害大のこ
と御見舞申し上げます。

☆第十八回ウエストン祭

今年のウエストン祭(六月七日)は、珍らしく曇一つない好天にめぐまれ、参加者は四百名にのぼる盛会であった。その前日島々から徳本峠を越えた組は、高山信濃、須賀東海両支部長はじめ百名を越え、横 日高の年配組も加わった。上高地には渡辺副会長その他東京及び地方からの参加者も多く、なかなかの賑いであつた。

当日午前の碑前祭は例年の通り取り行なわれた。澄んだ空の下に、梓川の清流をへだてて霞沢岳を仰ぎ、横さんの回顧談や尾崎喜八さんの新作詩の朗読を聞くのは、こよいい喜びであつた。安曇小学校の少女たちが捧げた花束に飾られたウエストン師のレリーフの前では、エーデルワイス諸嬢の合唱で式を終った後も、記念撮影が引きも切らず、信濃支部の人々は、横、尾崎、高山と三代の支部長を中心に押しならび、毎年くりかえす設営や接待の苦勞を忘れて、笑顔でカメラに向けていた。

昼すぎ小梨平のセントラル・ロッジで講演会が開かれた。日高氏の「随想」に続いて、横氏は「ウエストン師について」その在欧中のゆかしい言動と、日本の自然と人に対する深い愛着のほどを述べて、上高地の自然愛護を力説

し、尾崎氏は「山と人」と題して、山の美しさと山に登る人々の好ましさを説き、村井女史の話で会を閉じた。

戦後ウエストン祭が再開されてから十八年のあいだ、毎年これを主催して、今日のような盛会をもち来たり、北アルプスの山開きになくてならぬものに仕上げ、しかも質実敬虔な山人の集りとしての趣を守り通しておられる信濃支部のかたがたに敬意を表し度い(S.H.)

学生部報告

昭和三十八年九月以降

◇9月30日 委員会

◇山岳会ルーム P.M.六、三〇

◇10月22日 例会

◇青山学院大学 P.M.六、二五

◇11月8日 委員会

◇山岳会ルーム P.M.六、二五

◇11月15日 例会

◇上智大学

◇11月17日 ソフトボール大会

◇お茶の水大学グラウンド

◇12月5日 リーダー会

◇上智大学 P.M.六、三〇

◇12月6日 研究発表、討論会

◇明治大学 P.M.六、〇〇

◇議題

①遭難のケースの傾向と推移について

②直接原因から見た遭難

◇12月10日 委員会

◇12月16日 例会

◇上智大学 P.M.六、〇〇

から金峯にまいりまして、帰りに此処を通って増富に出た秋の思い出がございまして、三十年ぶりに二人でまたあるくのもいいじゃないかということで、それも兼ねてまいりました。特にこういう機会をお与え下さいました三井さん、神谷さん、小野さんを始め、皆々様に厚くお礼申し上げます。

このあと、記念撮影、記念植樹を行なう。紺碧の空のもと、まばゆいばかりの若葉の金山平、手をのばせば金峯山にとどきそうな五月の夕べの一時である。

さて、懇親会の準備もOK、あとから、あとから出るわ、出るわ。曰くモツ焼、山菜料理の数々。三杯酢、胡麻和え、サラダ、天ぷら。イワナの塩焼き、オデシ。一斉に感謝の声をあげる。こ

れも前後三回にわたった準備会の成果か。そのにぎやかなこと。ランプの下で、最後に有井館の心ずくしの手打そばを賞味する。微醺をおびて外にでてみれば、金山沢あたりから、仏法僧が鳴きだす。すばらしい星空。きくところによると、金山の星は日本で一番低く見えるとのことである。

明けて十七日、快晴。七時に朝食をおわり、それぞれへ向けて行動開始。神谷氏は、黒森の天使園(児童施設)へ慰問に、足立画伯は金山峠にキャンパスをたて、主力は富士見平へ、別動隊、といつても河野、鶴岡両氏に、山梨支部の若い者三人だが、瑞牆山に向う。ようやくころびだした石楠花を賞でながら頂上に十一時に着く。



(望月 雅郎 記)
中食をとりながら残雪の南アルプス、八ヶ岳を眺め、金山に午後二時にかえる。



中村清太郎画

五月理事・評議員会

七日・ルーム

△出席者 松方会長、渡辺副会長、理事折井、山崎、辰沼、金坂、田辺、松田、高橋、田村、武藤、岩佐、監事松本、評議員日高、神谷、望月、吉沢、藤井、藤島、織内、村井、石原東京支部長、芳野委員

△議事と報告

①理事事務分掌

折井(総務企画・海外連絡) 山崎(遭難対策・指導) 辰沼(調査研究・医療) 川上(総務企画) 松田(海外連絡) 岩佐(総務・集金)

深田(図書) 古沢(会報) 木下(調査研究) 金坂(指導) 村木(海外登山) 皆川(山日記) 梶本(指導) 高橋(指導) 田辺(指導)

武藤(医療・調査研究) 田村(医療・集金) なお、常務理事折井、辰沼、山崎、川上、松田、岩佐以上六名に決定する。

②山の絵展覧会開催について
五月十二日十四日、日比谷公園画廊にて「山に登る者が描いた絵」第一回の試みとして三十点程出展の予定。世話人辰沼、交野、山下。

③各支部よりの連絡事項

(1)東京支部 登山技術講習会開催、五月十六日～十八日、穂高岳にて。

(2)山梨支部 木暮翁碑前懇親会、五月十六日～十七日、金山平にて。

(3)信濃支部、第十八回ウエストン祭、六月六日～七日、上高地にて。

④エヴェレスト委員の追加依頼について

今西錦司、篠田軍治、入沢文明氏を依頼することに決定。

六月理事・評議員会

四日・ルーム

△出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事深田、折井、山崎、辰沼、岩佐、金坂、木下、松田、武藤、田村、村木、古沢、高橋、監事野口、松本、評議員日高、神谷、青木、藤井、藤島、織内、交野、吉沢、村井、小原。

△議事と報告

①ルーム移転について

・六月末、日本体育協会が新ビルに移転につき、本会も移転先を物色中、候補として五ヶ所を下校分の結果、左記に移転を諒承する

・渋谷区原宿一〇四「外苑コーポ」電話は当分同ビル架設東京四〇二局六五〇一～五

直通電話は目下申請中

②上高地「神河内山荘」開設について

・例年通り開設、会員の便に供する。

(1)管理人は前年に引続き、平林次雄夫妻に依頼。

(2)運営委員は高山忠四朗、小里頼忠、百瀬一茂、赤羽孝一郎、村上守、折井健一、岩佐吉雄、七氏に委嘱する。

③石川支部長交替について
・池田知幸支部長は福井県に転勤のため、後任支部長として磯野三郎氏(金沢市五宝町九一)に決定、事務引継をした。

④文務省主催「大学山岳部関係者協議会」開催について

(1)五月二十九日～三十日、御殿場、国立青年の家にて

(2)横、日高、辰沼、木下、金坂、藤田、徳久、芳野。

加藤東大山岳部長、沼田千葉大山岳部長、杉本慈恵医大山岳部長等九〇名の参加があった。

なお、関西関係は六甲で開催される由。

臨時理事・評議員会

六月二十三日・ルーム

△出席者 横名誉会員、三田、渡辺副会長、理事折井、辰沼、金坂、武藤、山崎、村木、田村、古沢、監事野口、松本、評議員日高、交野、織内、吉沢、牧野静岡支部長、石原東京支部長

△議事と報告

①エヴェレスト登山隊長決定について

・報告 エヴェレスト委員より経過の報告

四月二十七日開催のエヴェレスト委員会にて決定された諸事項を勘案の上、隊長候補者三名以内の推薦を各委員並びにヒマラヤ有識経験者に依頼の結果、三十九通の回答を得た。これ等を充分参考として、日高、松方、三田氏等とも諮り、最適任者として松方三郎氏を隊長として推挙することにした。

(参照) 四月二十七日エヴェレスト委員会決定事項

(1)一九六六年度エヴェレスト登山隊は登頂を第一目的とし、これに関連する科学調査をする。従って、科学調査の目標は高所における医学、気象学、地球物理学の範囲に止め、右調査研究と相俟って、酸素補給器を使用しない登頂も考慮する。

(2)このため隊は相当大規模なるべきを予想する。

(3)登山の時期は一九六六年プレモンスーン期。但し必要に応じ一九六五年に先遣隊を送ることがある。

(4)毎日新聞社に後援を依頼する。

(5)募金事業は、日高、早川両評議員を中心として更に具体案を作成する。

以上に依り、隊長には松方三郎会長に決定を了承した。

七月理事会

二日・ルーム

△出席者 理事深田、折井、山崎、岩佐、金坂、松田、武藤、田村、委任日高、監事野口、松本。評議員日高、交野、吉沢、東京支部沼倉、静岡支部牧野

△議事と報告

①エーデルワイスクラブよりのヒマラヤ登山後援依頼について

・同会創立十周年記念事業として、ペリ・ヒマール登山を計画に

▲ネ・日協会会長歓迎会

外務省の招きでネパール・日本文化友交協会 (Nepal-Japan Cultural Friendship Society) の会長 Prachand Man Singh 氏並びに同会員でネパールの日刊英字新聞 The Co-immuner 編集長 Gopal D. Srestha 両氏が三月八日来日されたので、本会では関係者有志により、ささやかな歓迎会を開催した。この会にはミッキムの留学生ソナム・ワンモ・トブデン嬢もみえられ、ヒマラヤ山麓の国の話に花が咲きまことに楽しい一タであった。尚両氏は三月二十二日午後帰国の途についた。

日時 昭和三十三年三月十日 十六時～十七日三十分

場所 山岳会ルーム

出席者 プラチヤンド・マン・シン、ゴバル・ダス・スレスタ、ソナム・ワンモ・トブデン、日高信六郎、西堀栄三郎、工業英司、村井米子、谷口現吉、吉沢一郎、折井健一、村山雅美、山崎安治、春田俊郎、大塚博美、小原勝郎、千谷壮之助、斎藤健治、金坂一郎、松田雄一、平山善吉、宮原純、熊谷義信、松沢憲夫、深津紀代美、勝田千尋(外務省文化課)、末広清明(外務省南アジア課)以上三十六名 (松田)

計報

カイザー・シャムシエル元帥 (Field Marshal Kaiser Shamsier

つき後援依頼の申出あり、同会坂倉登喜子氏より説明あり。

本会としては対外的に後援名義を使用されることは拒るが、同会は本会の会員でもあり、実質的な支援、便宜供与は惜しまないことで了解する。

② ルーム移転実施について

・日本体育協会並びに各競技団体は六月二十八日に移転を完了したが、本会には新ルームの内装工事の関係で七月十二日（日）に移転することに日本体育協会、日立製作所の了解を取付けてある。

③ ペルー山岳会々長よりの来信について

・東京オリンピックに同国派遣団と共にロバート体育局長の来日希望あり、本会より正式招待の要請あり。

滞日中の宿舎、経費等の点につき詳細不明のため問合わせること。吉沢評議員から出状することに決定。

Jung Bahadur Rana)

元ネパール政府の最高顧問、カイザール元帥は六月七日午前心臓マヒのため逝去された。同氏はネパール・日本協会名誉会長をつとめるなど非常な親戚家で、本会のマナスル、ヒマルチュリ登山隊はじめ日本の登山隊に寄せられた好意は忘れることができない。本会では植名譽会員の名で早速弔電を打電しておいたところ、丁重な返事が届いた。

在ネパール、ダヤル・インド大使

(H. Dayal, Ambassador of India)
在カトマンズのダヤルインド大使は五月下旬、ヘリコプターでソロクンブ地方を旅行中、急死された。同氏は一九四九年にヒマヤン・クラブにも入会されており、ヒマヤン通の大使として、各国の登山家に親しまれており、又近年同氏夫人のヒマヤン熱も有名であった。日本からの登山隊も蝶蛾調査隊をはじめ多くの隊が多の世話になっていたので、本会では直ちに、インド外務省気付にて、ダヤル夫人宛丁重な弔電を送り弔意を表した。

(松田)

昭和三十九年六月二十五日発行

東京都渋谷区原宿

一ノ一〇四外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集者 古沢肇

頒価二十円

電話(總)六、五〇一、五
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂

会 告

日本山岳会会長 松 方 三 郎

海外登山審議委員会
委員長 日 高 信 六 郎

昭和四十年年度国際スポーツ行事用外貨枠申請に関する件

近來、海外登山が盛んに計画され、相次いで立派な成果があげられていることは誠に御同慶の至りであります。

しかしながら、スポーツ用の外貨の制限は依然として存続しております。したがって日本山岳協会において海外登山関係の業務を担当する日本山岳会としては、従来通りの方針で海外登山の計画を審議し、体協当局に申請する予定であります。

ついでには明年度に海外登山計画をお持ちの団体がありましたら例年の通り来る十月十五日迄にそれぞれ、左記必要書類を当会宛御提出下さるよう御案内致します。

なお明年度とは昭和四十年四月一日以降四十一年三月末日迄に日本から出国する隊を指し、明年一月〜三月に出発するプレモンスーン期の登山隊は該当致しません。

記

1. 登山計画書
2. 必要外貨明細書

各三部

以上

各 位

昭和三十九年九月十日